

技術・家庭科における生活者の育成をめざしたカリキュラム開発

ー 衣生活の学習を例にー

学習開発コース (11220907) 齋 藤 弘 子

本研究は、中学校技術・家庭科 家庭分野の学習を通して、生活者の育成をめざすものである。それに迫るためには、批判的リテラシーの育成が不可欠であるとともに、実践的推論プロセスを取り入れた問題解決的な学習が有効であると考えた。そこで、これまで問題解決的な学習の実践がされてこなかった衣生活の学習を対象とし、カリキュラム開発を行い、問題解決的な学習の効果を検証する。

[キーワード] 生活者、問題解決的な学習、批判的リテラシー、衣生活、カリキュラム

1 問題の所在と方法

(1) 問題の所在及び研究の背景

①家庭分野における問題解決的な学習

平成20年度の学習指導要領改訂により、家庭分野の衣食住・家庭生活・消費・環境などの各内容に「生活の課題と実践」という項目が加わった。それは、よりよい生活を営む能力や実践的な態度を育成することをねらったものであり、将来にわたって自立した生活を営む見通しをもつことと、身近な生活の課題を主体的にとらえることが必要となる。そのために、具体的な実践を通して、課題の解決を目指す学習が不可欠とされた。それは、生活者としての自覚をもち、日常生活の中から課題を見だし、解決を目指す活動によって学習を深めていくことを明確に示したものである。

②家庭科の学ぶ意義と問題解決的な学習の重要な視点

家庭科という教科について鶴田(2004)は、「料理・裁縫という技能的なことも含むが、食糧、住宅、環境、家族と法律、家庭経済、消費者、ジェンダー、労働問題など、生活にかかわる様々な社会科学・自然科学に関連する課題を含み、生活をどのようにしていったらよいかという視点で学ぶ総合的な学習をする教科である」と定義した。さらに、「『生活者』として、生活文化・諸環境のあり方を批判的に捉えることが大切である。地球上の全ての人々が、安全で健康的な生活を送ることを求めている。その生活は自然と共生するものでなければならない。生きていく・生活するうえでの様々な問題に他人と共同して取り組むことが必要とされている。そのための知識や能力を身につけることが家庭科の学ぶ意義」と提唱した。

山田(2004)は、「最初に知識や技能を習得して

から問題解決的な学習を行うと、あらかじめ問題と解決の方向を制限することに陥りやすく、現代の課題を子どもとともに多面的に検討することはなにくいと考えられる。同時に、生活現実を根本的に問い、自分の生活とそれを支える社会システムを新たに創造・表現・発信していく力とはなり得ず、現実への適応、一定の家族像への同化を招いてしまうのではないかと懸念しており、問題解決的な学習の方法に重要な視点を与えている。

③PISA調査の「問題解決」と家庭科とのかわり
PISA(2003)は、問題解決能力について、「現実の領域横断的な現状に直面した場合に、認知プロセスを用いて、問題に対処し、解決することができる能力」と定義している。PISAと家庭科との関わりについて、荒井(2009)は、その定義の中の「領域横断型」と「問題解決のプロセスを大事にする」の特性は、生活の問題に目を向け、改善や解決方法を考え、よりよい暮らしを実践するという家庭科の目標と基本的に重なっていると述べている。それは、家庭科が対象とする生活そのものが、総合的で領域横断型だからである。さらにPISA調査(2003)の出題を見ると、「問題解決」の問題の種類や文脈、「問題解決」のプロセスは、家庭科の学習方法としても身近なものであることから、家庭科が担おうとする問題解決能力は、PISAの「問題解決」が目指す学力と重なっている部分があると言える。

④これまでの実践授業から見えてきた課題

『家庭科研究』の過去10年の実践¹⁾を見たところ、食生活に関する実践が約5割、住生活が3割、消費生活と環境が約1割、家庭生活が1割程度であり、衣生活の実践はわずか数例程度であった。また、技術・家庭科研究東北大会や県大会に

おける過去5年のデータを見ても、衣生活の研究授業や実践報告は皆無である。このことから、衣生活の内容では、授業研究がなされていないことが浮かび上がる。

(2) 研究の目的

問題の所在及び研究の背景を踏まえ、学習指導要領の目標である「課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる」に焦点をおき、「生活者」の視点から、これまでの学習内容やカリキュラム、生徒の実態をふり返り、「生活者」の育成を目指したカリキュラム開発を検討する。

(3) 研究の方法

衣生活の学習において、研究を進める。

- ①村山地区の中学校（14校）の家庭科教員からの聞き取り調査と、各学校の衣生活におけるカリキュラムの実態を年間指導計画資料から分析する。
- ②山形市内の中学校（2校）の生徒を対象にアンケート調査を実施し、衣生活に対する意識と実態を把握する。
- ③文献により、「生活者」の捉え方や、家庭科に求められている問題解決能力や批判的リテラシーの概念を明確にする。
- ④衣生活の内容において、問題解決的な学習や、批判的リテラシーを取り入れた、カリキュラム作成を行う。

2 先行研究の検討

(1) 家庭科に関わる重要な視点

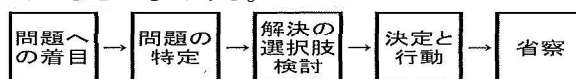
鶴田敦子(2004)は、「生活者」とは家庭生活の営みに価値をおき、それに関わる者としている。衣食住の営みによって新たな生活エネルギーを作り出すことができ、生命を生み育て、死を看取るといった機能を担う、私的な生活と捉えている。このような私的な生活は、人間にとって重要であり、大切にする立場に立つ人のことをそう呼ぶ。「生活者」は、家庭生活に価値を置いているからこそ、それが危うくなったり、あるいは保証されなかったりすることがらに対しては、異議を唱えるべき存在である。つまり、「生活者」から社会に対して、発言するという権利を行使する主権者である。さらに、「生活者」は、他人と共同して生活課題の解決に取り組む人とも捉えている。

天野正子(1996)は、「生活者」とは、生活の全体性を把握する主体であり、静的な形態ではなく「生活者」へと生き方を変えていく1つのダイナミックな日常の実践と定義している。また、天野はそれまで「あたりまえ」と思っていた生き方の

「あたりまえ」に疑いを抱き、新しい「もう一つ」の生き方を模索しはじめ、生き方をかえていく過程を「生活者になっていく」と表現した。

(2) 問題解決的な学習

荒井紀子(2009)は、問題解決的な学習のプロセスを、Janet, F. Laster(1995)の実践的推論プロセスを参考にして、以下のように図式化した。大きな特徴としては、「行為に至るプロセス」を重視しているところである。



「問題への着目」とは、問題に気づくことであり、現状を把握し情報を収集すること。「問題の特定」とは、状況を分析し問題を明確にすること。「解決の選択肢検討」は、問題を解決するためにいくつかの選択肢を検討すること。「決定と行動」とは、最善と思われることを選択し行動に移すこと。「省察」とは、結果を吟味し、問題点を明らかにして次の実践に活かせるようにすること。さらに、「問題への着目」「問題の特定」「解決の選択肢検討」の場面では、「なぜそうするのか」を多角的に検討する、批判的リテラシーを鍛える活動が重視されている。批判的リテラシーについては、問題を様々な角度からみたり、情報を相対化したり、解決策の中からベストな案を見つけ出したりする、粘り強い思考力と提唱している。

さらにLasterは、批判的リテラシーを「批判的・創造的・倫理的な考え」と捉え、その育成に向けて、教師は徹底的に追究させるための発問の工夫と、他者との意見交換の場面や、クラス全体で共有する場面など、協同的な学びの場面設定が必要不可欠だと述べており、他者と一緒に考えることを実践的な推論と称している。また、Eugene, B. Zechmeister(1992), James, E. Johnson(1922)は、批判的な思考力は、効率的なコツと訓練によってある程度伸ばすことが可能であり、その有効な手段は思考の原則を提示することであると述べている。

(3) これまでの実践の特徴

①『家庭科研究』過去10年の実践

前述した『家庭科研究』に掲載された過去10年の実践を調べると、実践的推論プロセスを用いた実践は皆無である。また、実践的推論プロセスを一部活用していたり、問題解決的な学習を取り入れたりしている実践は数例あるものの、食生活や住生活の内容が主であり、衣生活の内容に関する実践は1つもない。

さらに、問題解決的な学習の実践を取り上げ、その学習過程に注目すると、全ての実践において最初に基礎的・基本的な知識や技能を習得させてから、その後、問題解決的な学習を取り入れている。その中には、教師が提示した課題を生徒が追究するという実践が約2割、問題解決的な学習をしながら最後の授業で教師がまとめを行い、方向づけする実践が約1割程度見られる。さらに、問題解決的な学習を単元の柱に置き、それを支える基礎的・基本的な知識や技能などを学習するカリキュラムを取り入れている実践は皆無である。

②村山地区中学校の技術・家庭科の実践

村山地区中学校のうち、14校で衣生活の学習カリキュラムを調査したところ、全ての中学校において、基礎的・基本的な知識や技能を習得する学習からスタートしている。また、カリキュラム構成も学習指導要領に示された学習内容の順番に沿って作成されている。さらに、そのカリキュラムの中に、製作時間も設けられており、その時間は衣生活の学習の約2/3を占めている。授業時数が少ない上、食生活や住生活など他の学習時間も確保しなければならないため、衣生活の学習ばかりに多くの時間をとることができない現状がある。そのために、基礎的・基本的な知識と技能の習得と製作実習のみになってしまう傾向がある。

3 実践と結果（明らかになったこと）

平成20年度改訂の学習指導要領技術・家庭科編家庭分野「C衣生活・住生活と自立」の「(1)衣生活の選択と手入れ」「(3)布を用いた物の製作」、「D身近な消費生活と環境」の「(1)家庭生活と消費」「(2)家庭生活と環境」について、横断的、かつ総合的なカリキュラムを作成した。

(1) 題材の目標

- ①衣服のはたらき、衣生活の歴史や文化、社会や環境との関わりに関心を持ち、意欲的に学習に取り組むとともに、主体的に衣生活を営もうとすることができる。(生活や技術への関心・意欲・態度)
- ②衣服のおしゃれを多角的にとらえ、場面に合った選択や、自分の判断基準を持つことができる。(生活を工夫し、創造する能力)
- ③自分にとって本当の“おしゃれ”を取り入れたTシャツを製作することができる。(生活の技能)
- ④衣服のはたらき、衣生活の歴史や文化、社会や環境との関わり、衣服の手入れについて、理解することができる。(生活や技術について

の知識・理解)

(2) 学習計画

学習活動(時数)	★目指す生徒の姿	○教師の手だて
1. 自分好みの衣服を見つけ、その理由を考える。(1.5)	★自分好みの衣服を絵や写真で表すことができる。 ★その衣服を選んだ理由や、他者からどのようなイメージを持たれるかを考えることができる。	○ファッションショーの視聴やファッション雑誌、衣服の広告を参考にさせる。
2. 紙面ファッションショーを行う。(1.5)	★紙面ファッションショーを行い、衣服には様々な見方や感じ方があることに気づくことができる。 ★おしゃれについて考えることができる。 ★自分にとってのおしゃれについて課題を持つことができる。	○一人一人に選んだ理由を発表させ、班員がどのようなイメージを持ったかを話し合わせる。 ○おしゃれについてのイメージや考えを、絵や文字を用いて出し合わせ、これからの学習に向けて問題意識を持たせる。
3. 衣服と人の心理に関する実験を行う。(1)	★衣服と人の心理から、衣服には個性に応じた着用や、目的に応じた着用があることに気づくことができる。	○衣服の色によって、見る人のイメージが異なることに気づかせるために、様々な色のTシャツを着用させる。 ○制服と私服の行動心理について考えさせるために、ロールプレイを行う。
4. 衣服の流行と歴史・文化について考える。(1)	★流行の歴史や文化について調べ、流行には社会的、文化的な側面があることに気づくことができる。	○雑誌や広告などに着目させ、衣服の流行に気づかせる。 ○中世ヨーロッパの男女の衣服の写真や女子のスカート丈の変化の絵、流行の構造図などを資料として提示する。
5. 衣服の製造過程や服製の流通についてまとめる。(1)	★価格の異なる衣服を比較し、衣服の製造過程、服製の流通についてまとめることができる。	○価格の異なるシャツを提示し、見た目や手触り、素材、表示から比較させる。 ○エネルギー問題や環境について考えさせる。
6. 本当のおしゃれについて考えをまとめる。(1)	★衣服の流行がもたらす影響を多角的な視点で考え、本当のおしゃれについて考え、まとめることができる。	○流行の衣服の写真を提示する。 ○衣服の流行がもたらす影響について、心理的、社会的、経済的側面や環境、さらには長期的、短期的な視野で多角的に考えさせる。
7. 自分の考えた本当のおしゃれを取り入れたTシャツのデザインを考え、デザイン図を描くことができる。(7)	★自分の考えた本当のおしゃれを取り入れたTシャツのデザインを考え、デザイン図を描くことができる。 ★材料や用具を安全かつ適切に使用し、計画的に製作することができる。	○表現方法を具体的に考えさせるために、Tシャツの素材や色、形状、模様などの視点を与える。 ○材料や用具の使い方は、最初の時間に説明する。 ○毎時間、自己評価カードに記入させることで進捗を把握させる。 ○小グループで製作させ、教え合いを促す。また、机間指導を行い、必要に応じて個別に指導する。
8. Tシャツの手入れを行う。(2)	★Tシャツの汚れを調べ、その汚れに適した方法で、汚れを落とすことができる。	○日常生活で起こる汚れを分析させ、洗濯の方法を資料や実験を通して調べさせる。 ○汚れを長時間放置した布と汚れた直後の布の汚れ落ちを実験し、比較させる。
9. ファッションショーを行う。(2)	★製作したTシャツを着用して、自分の考えたおしゃれについて説明することができる。 ★これまでの衣生活の学習をふり振り返り、今後の衣生活についての考えをまとめることができる。	○Tシャツに合う下衣を考えさせ、着用させる。 ○自分の製作したTシャツや着こなし方、おしゃれについての考え方と比較しながら、他者の発表を聞くように促す。 ○学習プリントにまとめるように指示する。

(3) カリキュラムの特徴

- ①問題解決的な学習を柱においた学習を展開し、それを支える基礎的・基本的な知識や技能などを学習する。(図1)
- ②実践的推論プロセスを取り入れ、批判的リテラシーを育成するために、「問題発見」「情報収集・検証・比較検討」「選択肢の検討・決定」の場面では、「なぜそうするのか」「そうすることによってどうなるのか」を多角的に考えたり、検証したりする場面を設ける。(図2)

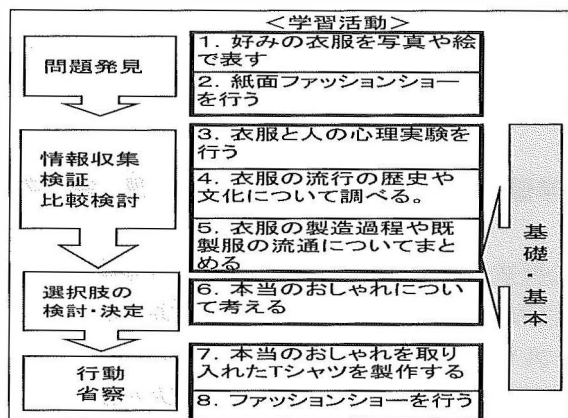


図1. 実践的推論プロセスを取り入れた問題解決的な学習の展開

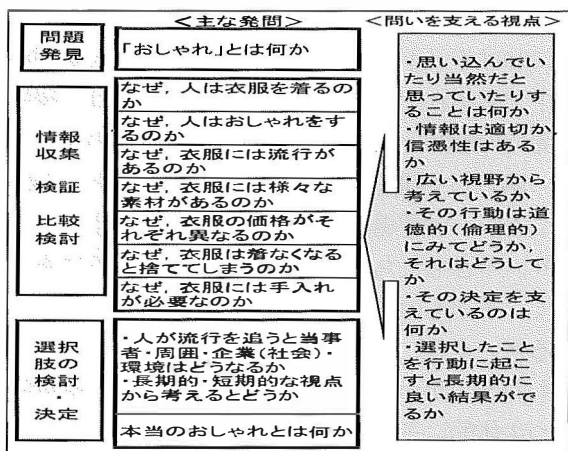


図2. 批判的リテラシーの育成をめざした発問の工夫

4 考察

衣生活の学習に問題解決的な学習を取り入れることを試みた。このカリキュラムは、製作時間を入れても、これまでとほぼ同様の時間内で実践することができる。また、生徒は実生活の問題を解決しながら、必然的に基礎的・基本的な知識や技能を習得することが可能となる。さらに、「行為に至るプロセス」を重視することによって、結果を吟味し、問題点を明らかにして、次の実践に活かせる学習となることが期待できる。

5 到達点と課題

(1) 研究に関する到達点

- ①衣生活の学習におけるカリキュラムの実態、生徒の学習状況や衣生活の関心と実態について把握することができ、衣生活の授業についての問題点と、改善の方向性を見つけることができた。
- ②衣生活の内容での問題解決的な学習のカリ

キュラムを作成することができた。

(2) 課題

- ①批判的リテラシーの育成に向け、どのような発問や思考場面の設定が有効かを検証する。
- ②衣生活の学習における問題解決的な学習カリキュラムの有効性や、生徒の批判的リテラシーの育成を、どのように評価・分析するかを検討する。
- ③生活者の育成の検証方法を検討する。

注

- 1) 家庭科教育者連盟編：『家庭科研究』，芽ばえ社，No. 193, 2001～No. 300, 2011

引用・参考文献

- 天野正子：『生活者とはだれか』，中央公論社，pp. 237-238, 1996
- 荒井紀子編著：『新しい問題解決学習』，教育図書，pp. 41-47, pp. 49-55, pp. 67-69, pp. 80-81, 2009
- 大学家庭科教育研究会編：『市民が育つ家庭科』，ドメス出版，2004
- 林末和子：「家庭科カリキュラムの構成概念としての実践問題の検討」，『日本教科教育学会誌』，第21巻，第1号，p. 7, 1998，「ブラウンの理論に基づく米国家庭科カリキュラムの解析」，『日本家庭科教育学会誌』，第41巻，第3号，1998，「米国と家庭科ナショナルスタンダードにみられる実践問題アプローチの影響」，『日本教科教育学会誌』，第23巻，第3号，2000
- 神山進：『被服行動の社会心理』，北大路書房，2004
- 官富彦：『インテリジェント実践知の考察』，産業図書，2009
- 児玉重夫：『ティーンズの教育思想』，白澤社，2004
- 宮本博章編著：『クリティカルシンキング（入門編）』，北大路書房，pp. 12-13, 2001
- 文部科学省：『平成20年度改訂 中学校学習指導要領解説 技術・家庭科編』，教育図書，2008
- 中間美砂子編著：『中学校高等学校家庭科指導法』，建帛社，2011
- 中野香織：『モードの方程式』，新潮文庫，2007
- 日本家庭科教育学会編：『衣食住・家族の学びのリニューアル』，明治図書，pp. 82-85, 2007，『生活をつくる家庭科 第3巻』，ドメス出版，2007
- 小川麻紀子他：「家庭科指導における批判的思考の導入（第1, 2報）」，『日本家庭科学会誌』，第45巻，第4号，2003
- 鶴田敦子：『家庭科が狙われている』大日本印刷，pp. 173-175, 2004
- 柳洋子：『流行の構造』，文化出版局，1982